エリック・カール作『はらぺこあおむし』の翻訳文について

古　相　正　美

Research on Japanese Translation of 'THE VERY HUNGRY CATERPILLAR'

Masami Furuso

(2006年11月29日受理)

はじめに

エリック＝カールの絵本は，そのほとんどがしかけ絵本である。幼少期の体験から明るい楽しい世界を子どもに提供したいという望みからである。彼自身が「私は，自分の絵本は，半分は本で，半分はおもちゃだと思っているんだ。」と述べている（『美しい未来への教室 SUPER TEACHES』日本放送出版協会　2001年３月)。そのしかけ絵本の中で，もっとも人気があるだろうと思われる本が『はらぺこあおむし』である。出版冊数の多さだけではなく，その形式，大型絵本から掌サイズまで，また贈答用の工夫を凝らした物と，様々な形式で出版されており，その版形の多さにおいても群を抜いている。保育現場においての利用法としても，読み聞かせだけではなく，美術教材としてしばしば利用されている。

その『はらぺこあおむし』を保育内容言葉等の中で取り上げるたびに，以前から気になることがある。絵本の関係書籍をみても，そのことに追究されているものがない。私の管見であれば良いのだが，そうでなければ，一人くらいは言及しておいてもよかろうと思い，ここに記すことにした。

『はらぺこあおむし』の原題は『THE VERY HUNGRY CATERPILLAR』。1969年に出版され，1987年明るい色調に改訂された。日本での出版は偕成社から1976年で1989年に改訂されている。日本語の翻訳者は，もりひさしである。

一　文体と意訳

日本の絵本の文体の特徴として，語り口調というものがある。これは昔話の語りから来たものと思われるが，話者が聞手に語りかけるという形が，幼児への絵本の読み聞かせの基本となっているのだろう。いわゆる，

むかしむかしある所に爺と婆がおったそうな。

というものである。そのためであろうか。『はらぺこあおむし』の日本語訳は，

「おや、はっぱの　うえに　ちっちゃな　たまご。」おつきさまが，そらから　みて　いいました。

と，いきなり会話文で始まる。訳文だけを見ていれば疑問を感じる事はないのだが，原文にあたってみると，

In the light of the moon
a little egg lay on a leaf.（１頁）

直訳すれば，

月明かりの中、
小さな卵が一枚の葉っぱの上に横たわっている。

となる。客観的描写の文体を，月を擬人化して読者に語りかける文体に変化させている。このことは訳者の手柄としてもいいようなものである。何も原文に忠実に訳出する必要はない。日本の子ども達に合わせて訳出すればよいだけのことである。そういった観点から言えば，こういった訳文の違いには何の問題もないことになる。

別刷請求先：古相正美，中村学園大学人間発達学部，〒814-0198 福岡市城南区別府５－７－１
E-mail：kyoko@nakamura-u.ac.jp

ただ，そうすると，第4場面以下の訳はどう考えるべきだろう。「one pickle」をそのまま「ピクルス」と訳しているが，子どもたちに理解できるのだろうか。少なくとも30年前の子どもたちに理解できていたとは思えない。第6場面右側の訳文は，

> まもなく　あおむしは、さなぎに　なって　なんにちも　ねむりました。
> それから　さなぎの　かわを　ぬいで　でてくるのです。

原文は，

> He built a small house, called a cocoon, around himself. He stayed inside for more than two weeks. Then he nibbled a hole in the cocoon, pushed his way out and ...

直訳すると，

> 彼は、さなぎとよばれる小さな家を自分の回りにつくります。その中に二週間以上もこもります。そして、さなぎに穴をかみあけて、押し分けて外へ出てきます。そして……

ということになる。まず，「さなぎ」の説明を省略している。そして二週間を「なんにちも」と変えている。おそらく日本の子どもたちは「さなぎ」を知っていると判断し，「二週間」という言葉は知らないと判断したのだろう。対象とした年齢は何歳くらいなのだろう。そして，結末の，

> 「あっ　ちょうちょ！」
> あおむしが、
> きれいな　ちょうに　なりました。

原文は，

> he was a beautiful butterfly!

直訳すれば，「彼は美しいちょうだったのです。」出だしと同様の意訳で「あっ　ちょうちょ！」が加えられている。また，原文では，文章は前場面から続いており，硬いさなぎから出てくると美しい蝶蝶に変身していたという，『みにくいアヒルの子』的な変身場面の設定になっている。しかし，訳文では場面は各々独立しており，劇的要素が薄れた表現になっているのである。

このように見ていくと，『はらぺこあおむし』の翻訳文は，原文が客観的描写の連続であるにもかかわらず，語り口調に変えられていることがわかる。そして，各部分も直訳はあまりなされず，意訳を中心に日本人の子どもにあわせて訳出されたと考えることができる。

二　訳出場面の問題

問題になるのは次の場面である。

> おひさまが　のぼって　あたたかい　にちようびの　あさです。
> ぽん！　と　たまごから　ちっぽけな　あおむしが　うまれました。
> あおむしは　おなかがぺっこぺこ。
> あおむしは、たべるものを
> さがしはじめました。

原文は次のようなもの。

> One Sunday morning the warm sun came up and-pop!-out of the egg
> came a tiny and very hungry caterpillar.

訳文の形態は先ほどと同じ調子で，原文とはかなり違った形に訳出している。ただ，原文にはない，「あおむしは，たべるものを　さがしはじめました。」という一文がある。これは，原文では次の場面にある「He started to look for some food.」を一場面早く訳したものである。絵はどちらの場面にもあおむしが登場しており，違和感はない。しかし，次の場面の言葉がなくなった日本語版は，こともあろうに右側の穴空きりんごの部分に書かれるべき「そして　げつようび、」を，代わりに訳出することになった。

この場面はエリックカール得意の仕掛け部分である。右側はめくっていくにしたがって，月曜日のいちご，火曜日のなし，水曜日のすもも……と続いていく。しかし，左側はずっと見えたままで，本来なら「食べ物を探し始めました。」とあるべき部分が，「そして　げつようび、」のまま残っていくことになる。これが，一番の問題である。次々に変化していくべき部分の一部が，隠れることなく残ってしまう。これでは原作者の意図からあまりに外れすぎることにならないだろうか。

日本語版はさらに，月曜日のりんごから続く

「But he was still hungry.」の訳を，各仕掛けページの裏に訳すという変化をつけている。確かに，食べおわっても「おなかはぺっこぺこ」という方が内容にはあっているし，原文が「still」の繰り返しにもかかわらず，訳文が「まだ」「やっぱり」「それでも」「まだまだ」と変化する所などは原文を越えた良い訳だと思われる。しかし，最大の失敗は，金曜日のオレンジの後の「But he was still hungry.」を訳出することができなかったことである。裏がないので当然のことであろうが，省略すべきではなかろう。そのように考えると，原文通りに訳さないという意訳の正当性が問題となるだろう。

最後に

以上の簡単な指摘なのだが，外国文学の翻訳という時には，必ず問題となる直訳・意訳の延長線上にある問題だと言えよう。何も直訳が正しいなどと主張するつもりは，さらさらない。特に絵本の翻訳の場合，日本の子ども，それも就学年齢以前の子どもたちに理解できるかという前提がつくだろう。子どもたちに理解できない言葉・概念が出てきた場合は，その年齢の子どもたちに理解できるような言葉に意訳しなければならない。それは当然である。

しかし，この『はらぺこあおむし』の場合，言葉の配置されている部分を変更して翻訳するという，一般的には考えられないような改変がなされている。こうした形の意訳は本来するべきではなかろう。むろん，原文と翻訳文とは別の作品になるという考え方もできるだろう。それを認めたとしても，こうした改変の結果は，文字どおり「別の作品」になると言っても過言ではない。

確かに『はらぺこあおむし』は，現在の訳文で，記録的な部数を発行している。したがって，もはやこの訳文は完全に定着したものだといってよい。多くの子どもたち，多くの保育者がこの翻訳文を暗記し，朗唱している。それを否定することはできないし，確かに良訳だと言える部分も多数ある。

それでも，私は原文の持つ客観性，物語性をも大切にしたいと思う。できうれば，別の訳文でもうひとつの『はらぺこあおむし』が出版されないものか。原文の持つあっさりとした描写をも子どもたちに味合わせることができれば，エリック＝カールの魅力がさらに理解されていくのではなかろうか。